月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.148



レーヴェが命を賭して切り開いた道
その先に待ち受ける未来とは？
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～

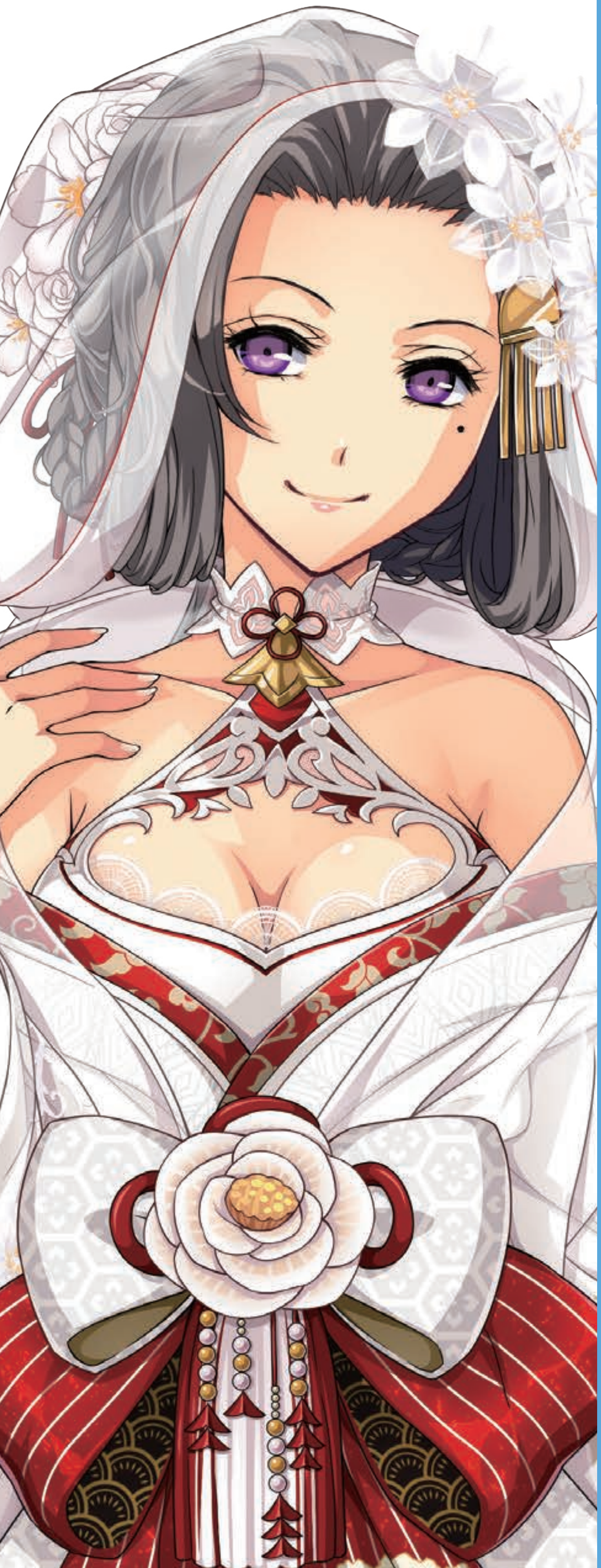
2組のSPiKAがライブ対決！ 気になるメンバーは？
も～っと集まれ！ ファルコム学園

クロチルダの意外すぎる(？)●●姿に注目！
『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース
英雄伝説 碧の軌跡
いつか貴方とお茶会を

発売日がついに決定！
注目の"航海探索"の詳細も到着！

『イースX -NORDICS-』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

発売日が2023年9月28日に決定！さらに注目の“帆船操作”についての情報も到着!!





『イース』シリーズ生誕35周年記念作にして、ナンバリング最新作となる『イースX』。今回も物語の鍵を握る個性豊かなキャラクターの情報が続々と到着！　さらに、シリーズ初のシステムとして大注目の帆船操作についての詳細も明らかとなった！

イースX -ノーディクス-

- ◆発売日：2023年9月28日
- ◆ジャンル：アクションRPG
- ◆対応機種：Nintendo Switch、PlayStation5、PlayStation4
- ◆プレイ人数：1人
- ◆CEROレーティング：審査予定
- ◆価格：［通常版］7,800円（税抜）
  ［《アドル・クリスティン》Edition］11,000円（税抜）

©2023 Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

レイフ・イヴリーズ

（CV：羽多野渉）　年齢：17歳

大丈夫だよ、グレン。お前のアホは生まれつきだから。

グレンやクルスたちと幼馴染だが、カルナックの自宅ではなく街の外で「出稼ぎ」をしている少年。
グレンやロザリンドとの会話では冗談交じりに相手をからかうなど年相応の反応を見せるが、時折妙に大人びた一面を覗かせることも。故郷へ戻ってきても家族との接触を避けているらしく、自宅にも近付こうとしない。











はいはい、やーめー。ケンカするなら
もっと男の子らしく元気にやりなさーい。

ミラベル・アスラッド

（CV：阿澄佳奈）　年齢：21歳

父親が開いたカルナックの診療所に勤めている看護師。
朗らかで人当たりの良い女性だが意外と肝が据わっており、海賊姫であるカージャを前にしても自然体で接する。
グレンたちは幼少期から世話になっているためか決して逆らうことのできない存在だが、同時に良き理解者として彼らの成長をさりげなく見守っている。









剣士よ……
大いなる力、《マナ》……貴方に……

リラ （CV：若山詩音）

年齢：？？歳

アドルがカルナックの浜辺で拾った不思議な貝殻——その貝殻を通じて、アドルにマナの力と予言を与える謎の女性。
彼女の言葉によるとどうやらオベリア湾のどこかにいるらしく、アドルに助けを求めてくるのだが……。









ワシは全てを忘れてしまった。
自分の名も……ここで何を待っていたのかも。

名もなき老人 （CV：千葉繁）

年齢：？？歳

とある島で畑を耕しつつ、小さな小屋でひとり暮らしをしている大柄の老人。
島を訪れるアドルにマナの使い方や戦いの心構えを教えてくれるが、老人は自身に関する一切の記憶を失ってしまったらしく、何故島で暮らしているのか？
何処からやって来たのか？
そして、自分の名前すら憶えていないという。







注目の《帆船》探索の詳細が到着！

航海の中では敵船に乗り込んで戦闘も!?

本作の注目ポイントとして、帆船《サンドラス号》を操作して自由に海を航海、探索することができるのは既報の通りだが、今回はその詳細が到着！　未知の島々を探索していく中では、敵船との海上バトルも発生するようだ。

海上操作



海上では、左スティックによるフリー移動のほか、自動操作による航行も可能。視点は3種類（ロング／ミドル／ダイナミック）の切り替えが可能になっており、中でも舵輪の後方から映すダイナミックモードでは、より臨場感のある航海が楽しむことができるようだ。さらに、“マナ”の力を利用した「マナセイル」を発動することで一定時間、高速で前進することも可能に。







敵船との海上バトル！

海上では、時折グリーガー（不死者）たちの乗る敵船との海上戦も発生！　海上戦ではサンドラス号を操作しつつ、特徴の異なる砲弾を使い分けてバトルを繰り広げるようだ。また、移動手段の「マナセイル」は攻撃手段としても使用可能なほか、“マナ”を利用した「マナバリア」では、一定時間、敵の砲撃から船を守ることもできるぞ。





【鉄球弾】

弾速／連射性能が低い通常砲弾
弾数制限が無いものの、命中精度が低いため小型船との戦闘には不向き



【ラピッドシェル】

連射性能に優れ、命中精度も高い砲弾
移動速度が速い高速船との戦闘で威力を発揮



【フレイムボール】

着弾させることで、敵船に「燃焼」効果を与える砲弾
基本性能はそれほど高くないものの、「燃焼」により継続的にHPや耐久値を減らせる



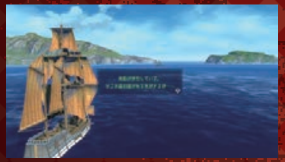
商船を発見して
レアアイテムをゲットしよう！



オベリア湾の探索中、単眼鏡で遠方の船を確認して「商船」であることが分かると接舷して海上で直接品物の売買を行うことができる。品物はゴールドで購入するだけではなく、探索で入手した素材と交換することでも手に入れることができる。その中にはもちろん、「商船」でしか入手できないレアなアイテムもあるようだ。









敵船に乗り込んで大暴れ！
迫力のアボルダージュ（移乗攻撃）戦！

一部の強力な敵船には耐久値があり、サンドラス号の海上攻撃で削り切ると停船させることができ、そのタイミングで直接敵船に乗り込みんで、接舷攻撃を仕掛けることができるようだ。接舷攻撃では、敵船の甲板でアドル＆カージャ操作による通常バトルが展開。このバトルに勝利すると、敵船が所有している宝箱からレアアイテムをゲットできるのだ。







船を改修＆船員を訓練して
さらに快適な航海を繰り広げよう

KEY WORD

サンドラス号

カルナック街外れの旧造船所に遺棄されていた古い帆船。
とある事件がきっかけでアドルとカージャが乗り込み、以降、オベリア湾内の移動手段として使われるようになる。
旧式の帆船で航行能力・武装共に心もとないが、改修を重ねることでサンドラス号の様々な機能が拡張されていく。

冒険中、提案書に記載された船の改修や船員たちの訓練を実施することでサンドラス号の基本パラメータや兵装を強化することができる。強化すると火力、耐久力、起動性能が上昇するほか、マナの力を利用する「マナセイル」の能力強化も可能に。さらに、さらに、一部の提案書を実行することで新たな砲弾を装備させることもできるようだ。



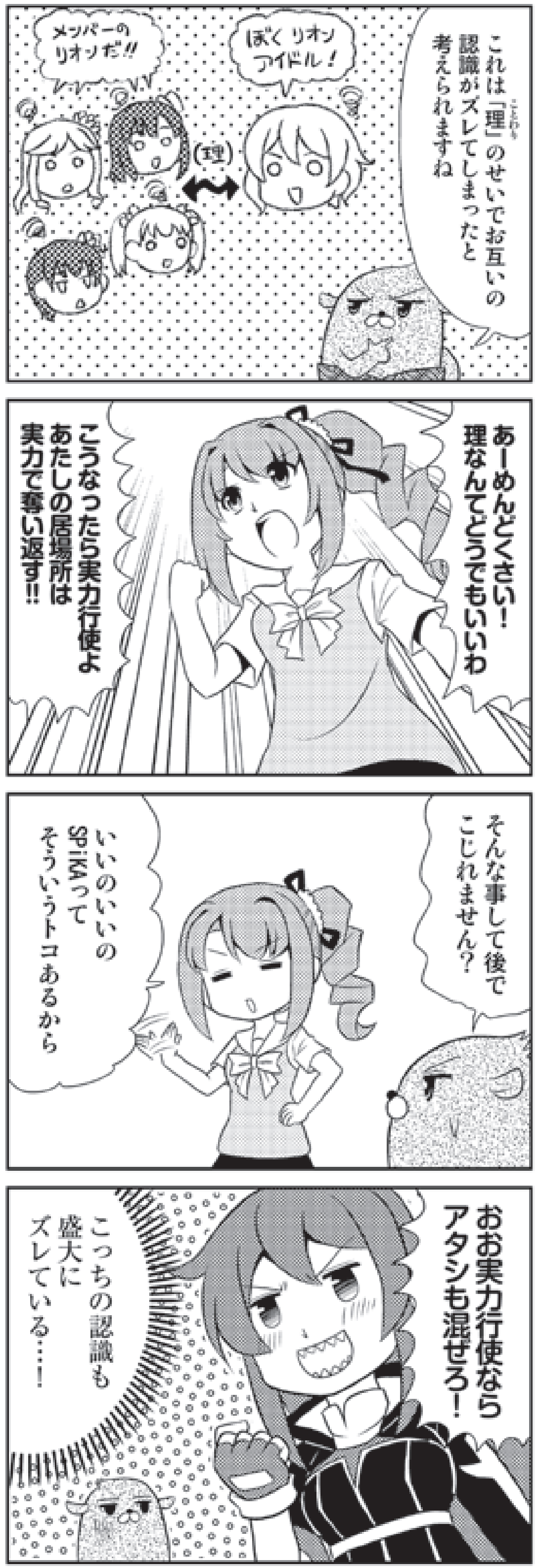
★アイドルの星に向かって駆け上がれ!★



おかしい同僚



実力行使の世界



最初の志願者



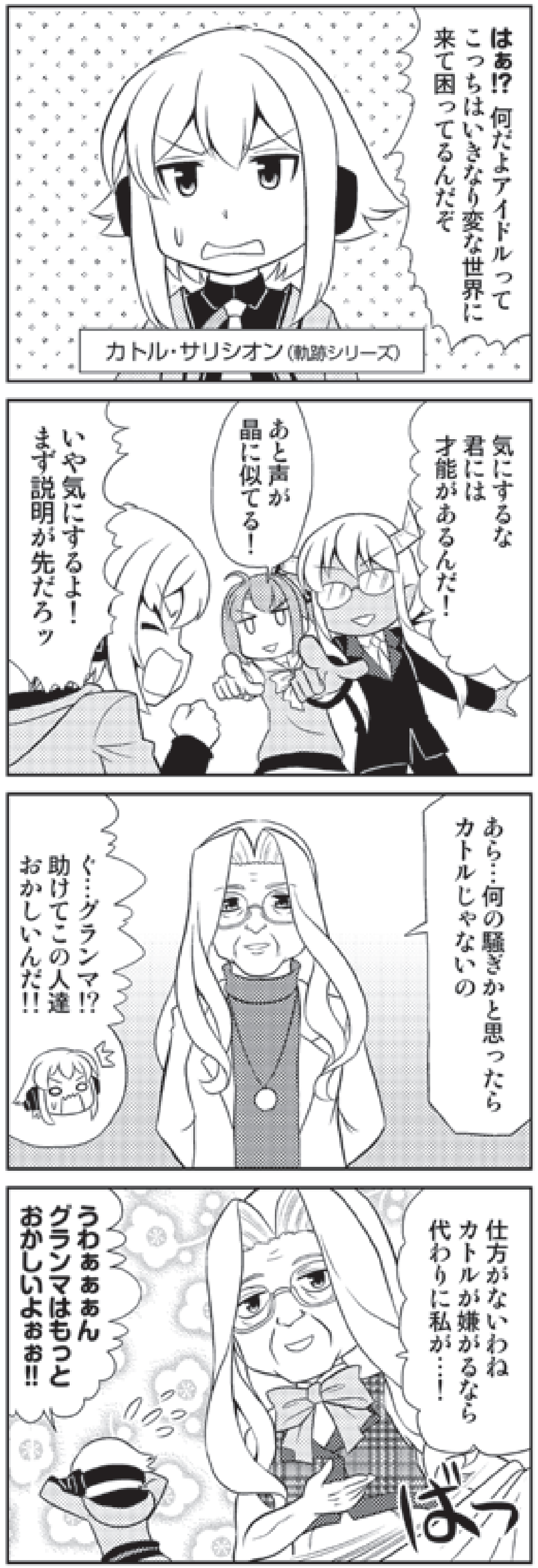
集まらない理由



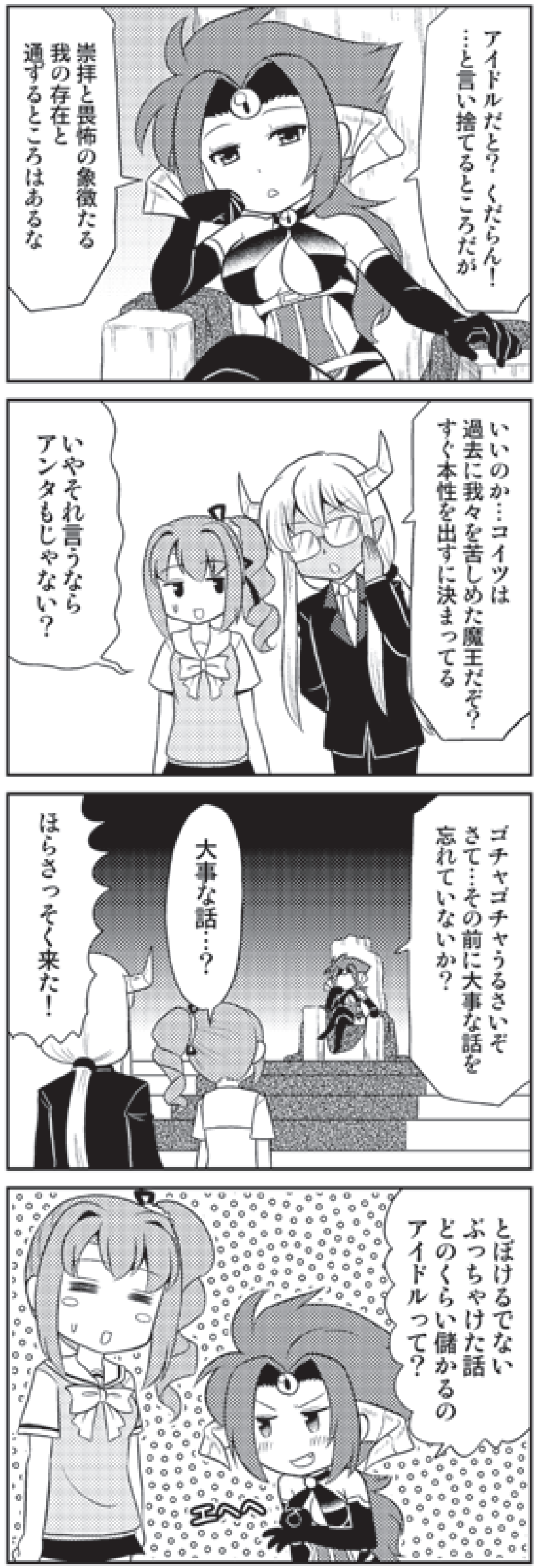
スカウトの駆け引き



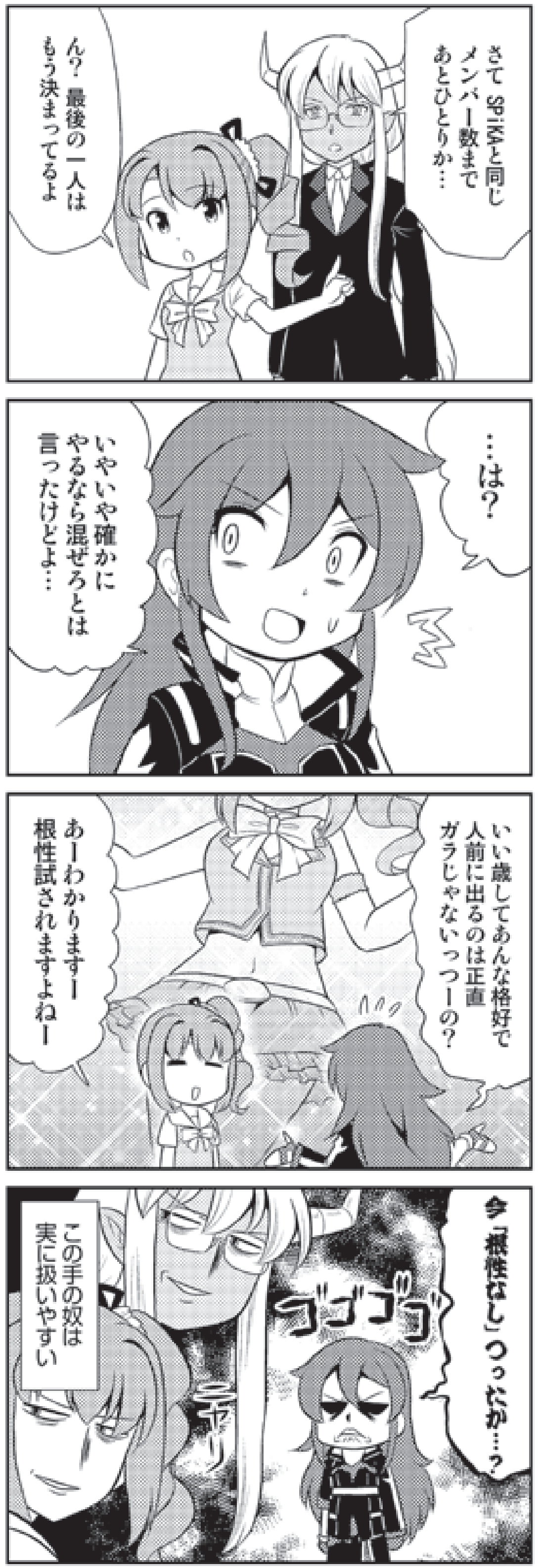
最悪な初登場



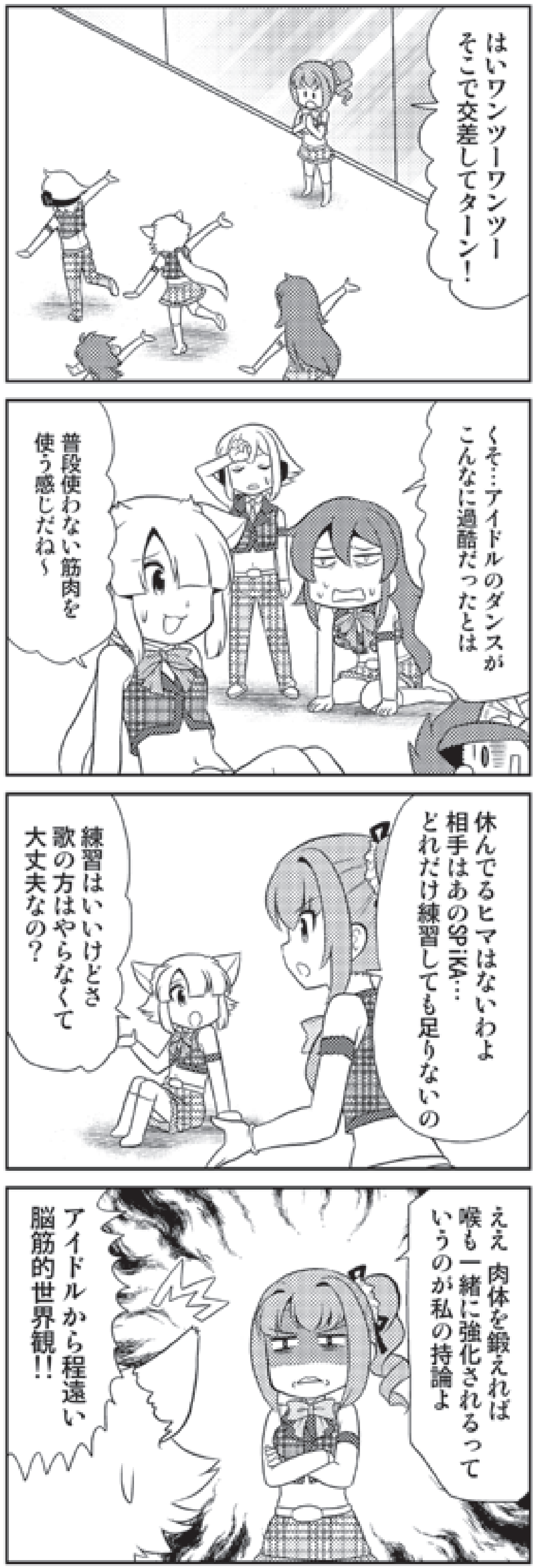
大事な話



最後のメンバー



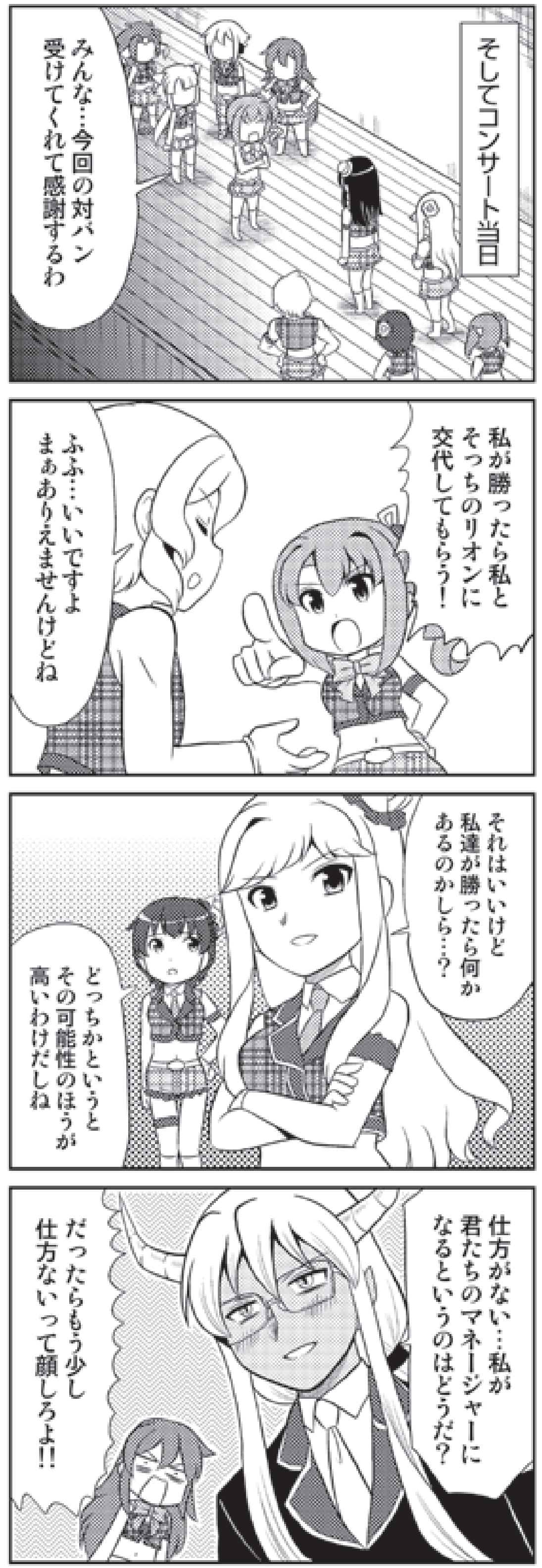
筋肉はすべてを解決する



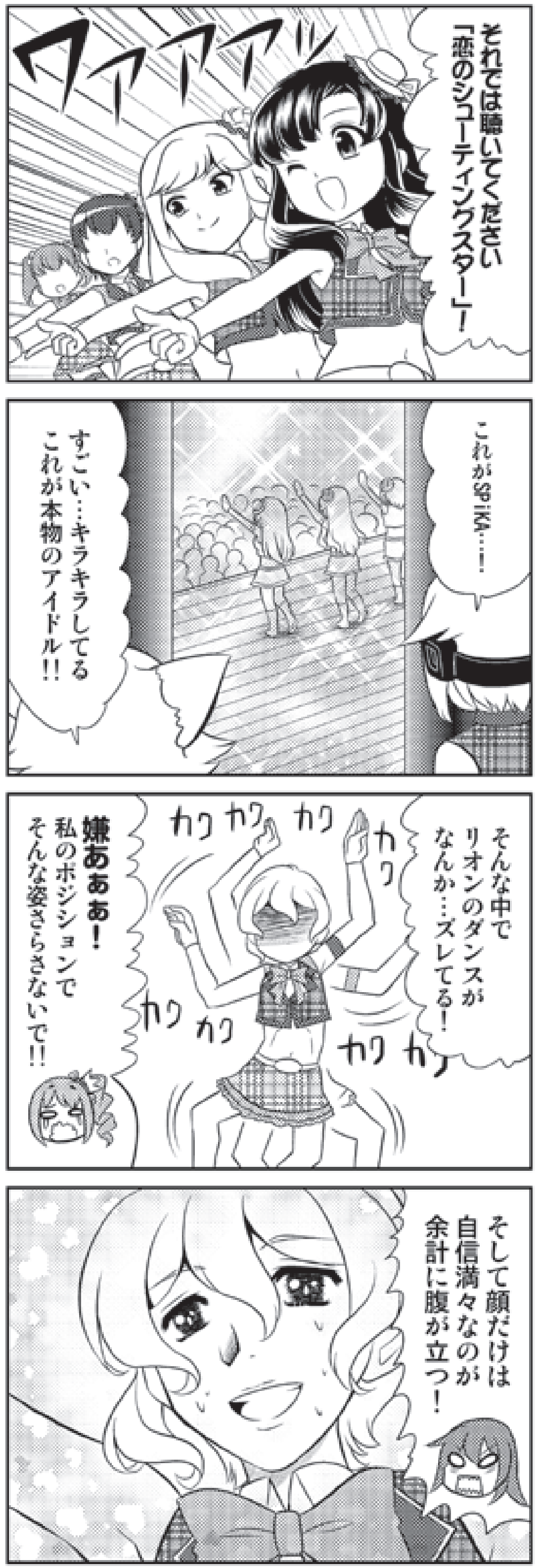
聞くタイミング



勝者が得るもの



殴りたい顔

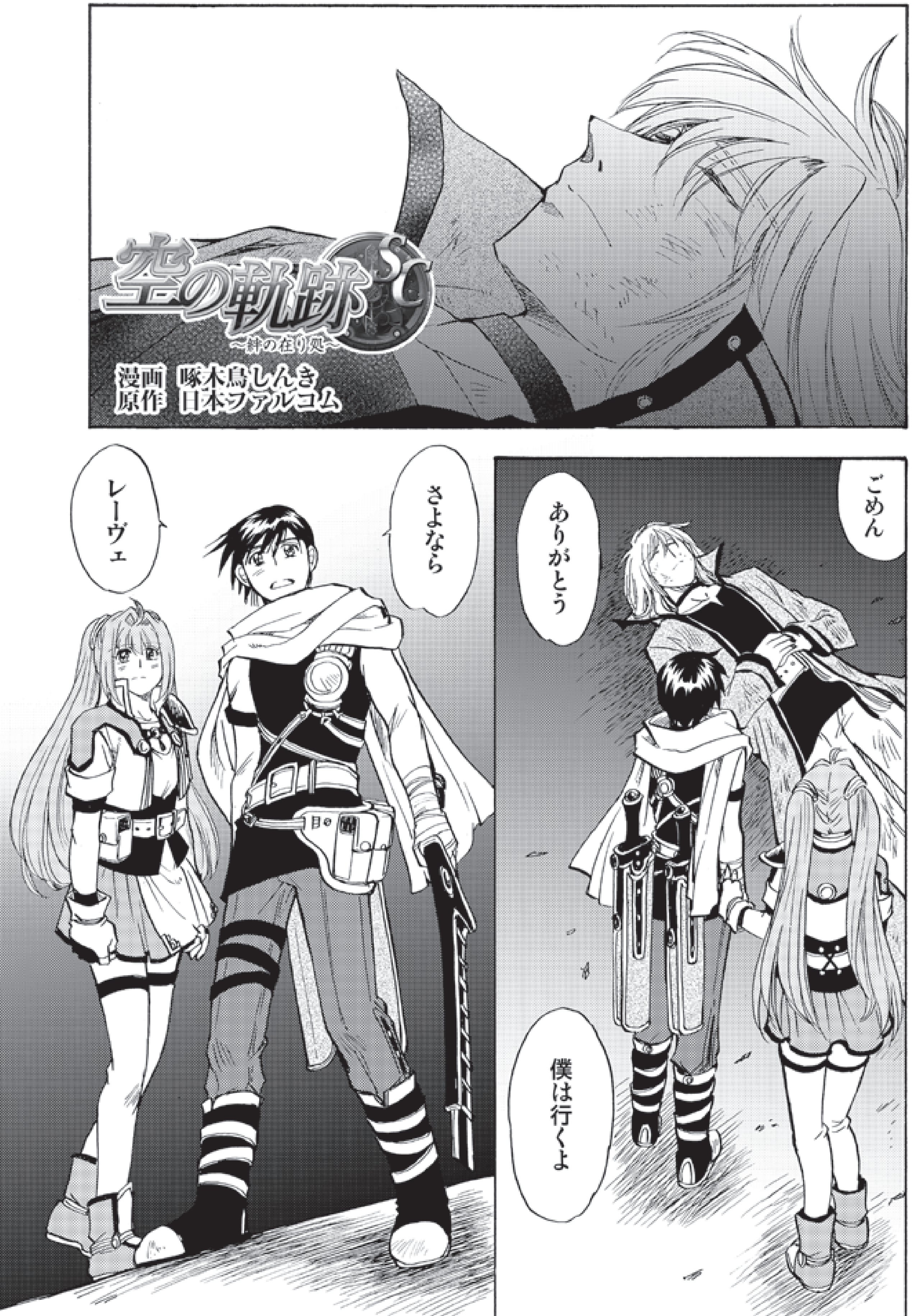


剥がれたメッキ



そして伝説の始まり




空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
ごめん
ありがとう
僕は行くよ
さよなら
レーヴェ


穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！待望の第2巻だよ！
も～っと集まれ!
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円+税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y
発行：フィールドワイ フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks


そんな…
馬鹿な…
《輝く環》が消えるなんて…
こんな事態は…盟主の予言にはなかった…!
まさか…
試されたのは私も同じだったということか…!?
…っ
戻ったら問いたださなくては…
悪いけどそれは無理やね


七耀教会の神父…?
いつのまにこんなところへ…
貴様のような雑魚に関わっている場合ではない!
どけ!!


ぽいっ
あー
すまん
すまん
オレ雑魚に
見えるけど
それなりに
修羅場
くぐってんねん
ま…
それでも
本調子のあんたに
勝つんは
難しかったんやけど
今やったら
付け入る隙が
あるからな


なに?
矢…?


オレの
本当の任務は
《輝く環》の
調査やない
最悪の破戒僧
ゲオルグ・
ワイスマン
あんたの始末と
いうわけや
…なるほどな
それで
文字通り
一矢報いて
みせた…と?
だが
この程度の攻撃で
この《白面》を
滅するなど……


な…
なんだ!?
身体が…!
《塩の杭》
かつて
ノーザンブリア北部を
塩の海に変えた
禁断の呪具や


私一人を始末するために!?
こんなものまで持ち出したのか!?
あんたにはおあつらえ向きやろ
おっ…おのれ…!
あんたはやりすぎた いくら教会でももう見過ごすわけにはいかんのやて
おとなしく滅んどき
おのれぇ…!
狗があぁぁ!!

狗か
ま…その通りなんやけどね
うふふ
噂に違わぬ冷酷ぶりじゃない
次回に続く



◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks



◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

Nintendo Switch™版
『英雄伝説 零の軌跡:改』『英雄伝説 碧の軌跡:改』発売決定！

2020年に発売されたPlayStation® 4版『英雄伝説 零の軌跡：改』『英雄伝説 碧の軌跡：改』が、日本一ソフトウェアからNintendo Switch版として2023年8月31日（木）に発売決定。
“高画質＆高音質化”や、ボタンひとつでイベント&フィールド2倍速、戦闘4倍速に切り替えが可能な“高速スキップモード”等も搭載しています。

















■対応機種：Nintendo Switch™　■発売日：2023年8月31日（木）発売予定
■価格：3,980円（税込4,378円）　■プレイ人数：1人

Nintendo Switch™版公式サイト
https://nippon1.jp/consumer/zeroao/

「エマ・ミルスティン」フィギュア化決定！
フィギュア「アルティナ」「リィン」再販売決定！

コトブキヤ×日本ファルコムが贈る『軌跡シリーズ』フィギュア化計画7弾として、トールズ士官学院 旧《Ⅶ組》の一員である「エマ・ミルスティン」が初の立体化決定。続報をお楽しみに！
さらに、フィギュア化第1弾の「アルティナ・オライオン」、第2弾の「リィン・シュバルツァー」も再販売が決定しました。詳細は決まり次第告知予定です。この機会をぜひお見逃しなく。





ふぃぎゅあブログ
https://www.kotobukiya.co.jp/figure-blog/figure-blog-309153/
「アルティナ」:https://www.kotobukiya.co.jp/product/product-0000004225/
「リィン」:https://www.kotobukiya.co.jp/product/product-0000004289/

MODEROID「《蒼の騎神》オルディーネ」予約受付中！
「《灰の騎神》ヴァリマール」再販も決定!!

「英雄伝説 閃の軌跡」シリーズより、七体の騎神の一角「《蒼の騎神》オルディーネ」が、グッドスマイルカンパニーよりMODEROIDシリーズでプラキット化。2023年1月に発売された「《灰の騎神》ヴァリマール」の再販売も同じく予約受付中です。この機会をぜひお見逃しなく！









■メーカー受注期間：2023年4月18日（火）～7月5日（水）21：00
※受注期間以降は予定数に達し次第受付終了となります。
■仕様：組立式プラスチックモデル・ノンスケール　■発売時期：2023年12月
■価格：7,500円（税込）

商品ページ
https://www.goodsmile.info/ja/product/14255/

6月29日発売「東京ザナドゥeX+ for Nintendo Switch」プレイ日記①を公開！

『ふぁるコラム』初登場のつくしちゃんが綴る、「東京ザナドゥeX+ for Nintendo Switch」プレイ日記①、②を公開しました。プレイ日記①では、東京ザナドゥの日常やイベントシーン《アドベンチャーパート》、プレイ日記②ではキャラクターの魅力やゲーム内の小ネタについてご紹介しています。ぜひチェックしてみてください！









URL
https://www.falcom.co.jp/falcolumn

© Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
５月はおなじみナハトの奮闘記を開催。リベールの“あの”名物大佐が登場！
そして、クロチルダがこの時期にぴったりながらも意外すぎる新衣装姿を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.24 リシャール編」が実装！

ある日、遊撃士協会を訪れたリシャールはナハトに“頼み事”をする。
「カノーネ君に手土産のひとつも買っていきたくてね」
果たして二人が選ぶクロスベルのお土産とは……？









※このイベントは終了しています。

5月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



花嫁・クロチルダ

毎年恒例の“６月の花嫁”衣装。そんな中、クロチルダが披露してくれたのはまさかの白無垢姿！《蒼の深淵》のイメージが強い彼女だけに、純白の艶姿の威力は抜群だ。

『暁の軌跡』極秘資料館

「ワンピース・アルティナ」衣装デザインラフ
（2022 年 6 月実装）



「花嫁・クロチルダ」衣装デザインラフ
（2023 年 5 月実装）



※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

© Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.　© USERJOY JAPAN Co., Ltd. All Rights Reserved.　© USERJOY Technology Co., Ltd. All Rights Reserved.


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TVアニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる★アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円＋税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

英雄伝説 碧の軌跡 ～いつか貴方とお茶会を～

最終回

特務支援課のゆる～い(?)日常第２弾！

意外なキャラクターたちも続々登場！



©YUKIYA MURASAKI , KUBOCHA

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。その主人公を務めるロイド・バニングスら特務支援課メンバーと、彼らとともに壁を乗り越え続けた仲間たちの「あったかもしれない」ゆる～い日常の日々を描いた外伝小説の第２巻！「あのキャラとあのキャラが!?」と思わずにはいられない意外な組み合わせも続々登場の一冊をご堪能あれ！

製品情報

好評発売中

著　　　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　　価：1,210円（税込）

効率的に支援要請をこなしていくため、二手に分かれることにする。

ロイドはエリィと二人で、まず住宅街のトラブルを解決し、そして、中央広場まで戻ってきた。

昼前――

「思ったより一件目は早く片付けられたな」

「そうね。お昼はどうする？」

「うーん、ランディたちと合流したほうがいいかな？」

「あちらは、どうなっているかしら？」

「連絡がないってことは、うまくやってるんだと思うけど――ん？」

ふと、ロイドは人混みの中に、見知った顔があったような気がして、そちらに注目する。

「…………あれは、リーシャじゃないか？」

「行ってみましょう」

周りの人たちにぶつからないように気を付けながら向かうと、黒に近い紫色の髪の少女が、

振り返った。
　さほど背は高くないが、スタイルがよく、なによりも人目を惹くルックスをしている。ノースリーブのシャツにホットパンツという露出の多い格好だったが、彼女の表情のせいか、明るく健康的な印象を受けた。
　リーシャ・マオは劇団アルカンシェルで人気急上昇中の大型新人だ。トップスターのイリア・プラティエに次ぐナンバー2との呼び声も高い。
　とある事件をきっかけに、ロイドたちとは友人の間柄にあった。
「あ、ロイドさん。それに、エリィさんも！」
「こんにちは、リーシャ」
　軽く片手を挙げて挨拶する。
　エリィも会釈した。
「今日は、お休みなのかしら？」
「いえ、舞台装置の点検があるらしくて、練習は午前中だけでした。夜には公演がありますけど」
「なるほどね」
「エリィさんたち、今日はお二人だけなんですね。もしかして、デートですか？」
「えっ⁉」
　驚いて目を丸くしたのはロイドだった。

　エリィが赤面しつつ笑う。
「そんなんじゃないわ。ちゃんとお仕事中よ？」
「ふふ、冗談です。最近は、どうですか？」
　キーアを保護した件は、警察とルバーチェ商会が裏で手打ちにしたため、情報は公開されていない。広場で詳しく話せるわけもなかった。
　リーシャのほうも、それについて尋ねたわけではないだろう。彼女はロイドたちがルバーチェ商会の《黒の競売会(シュバルツオークション)》に乗りこんだことも知らないはずだった。
「そうだな……一難去って、また一難といったところかな？　気になる話もあるけど、今は情報を待っているところだよ」
「気になる？　なにかあったんですか？」
「まだ詳しくは話せないんだけど……どうやら、共和国のほうから犯罪グループが流れてきたらしい」
「そうですか……恐いですね」
「ああ、クロスベルでも同じ事をするかは、わからないが……共和国のほうでは誘拐事件を起こしたという話なんだ」
「誘拐⁉　それは酷いです！」
「なにか気になる話があったら頼むよ。あと、リーシャも一人歩きは控えてくれ」

「わかりました」
そうでなくても、クロスベル市は治安がいいとは言えない。うかつに女性や子供が一人で出歩いていたりはしないと思うが。
念のため、遊撃士たちとも連絡を取っておいたほうがいいかもしれないな、とロイドは思った。
考え事をしている姿に、リーシャが微笑みを浮かべる。
「いつも、お忙しそうにしていますね」
「ん？　そうかな？　まぁ、少しでも街がよくなるように、がんばらないと」
「ほどほどに休憩も入れてください。休むことは、日々の研鑽と同じくらい大切ですから……なんて、イリアさんからの受け売りですけど」
「ははは……あのイリアさんの言うことなら、きっとその通りなんだと思うよ」
「はい」
あ、そうだ――とエリィが小さく手を叩く。
「休憩といえば、リーシャさん、このあとの予定はどうなっているのかしら？」
「このあと？　そうですね……オーバルショップで戦術オーブメントのメンテを……あっ、いえ！　とくに急ぐ用事はないですけど？」リーシャが、はたはたと両手を振った。
それなら、とエリィがお誘いの言葉を続ける。

「午後三時に支援課ビルで、ちょっとしたお茶会をするの。美味しいケーキがあるから、よかったらいらっしゃいません？」
「え？　それは嬉しいですけど……なにかのお祝いですか？」
「いえいえ、ぜんぜんそんなんじゃないのよ。ランディがケーキを買ってきすぎちゃっただけで……」
「ああ、なるほど」
事情を察したらしく、三人で苦笑してしまった。
リーシャが丁寧に頭をさげる。
「そういうことなら、お呼ばれさせていただきます」
「うふふ、たくさんあるから、他にも誰かいたら声をかけてみてちょうだい」
「わかりました。楽しみにしておきますね」
「そうそう、紅茶もあるのよ？」
エリィが茶葉の名前を口にすると、どうやらリーシャは知っていたらしく、「それは良いものですね」と興奮気味だった。
ロイドは頭をかく。
茶葉の種類までは詳しく知らないのだった。
ほどよく話がまとまったところで、エリィが話を切り上げる。

「それじゃあ、また後ほど」
「はい！　三時にお伺いします」
小さく手を振るリーシャに別れを告げて、ロイドはエリィと共に次の支援要請へと向かうのだった。

リーシャは二人の姿が見えなくなるまで、小さく手を振る。
人混みの中で、また一人になった。
お茶会は久しぶりだ。
練習のあとに、イリアさんと紅茶をいただくことはあるけれど、そういうのとは違う感じがする。
そもそもリーシャは同年代の友達がろくにいなかったので、こういうことが新鮮で楽しみだった。なんだかソワソワしてしまう。
そういえば、まだ他にも声をかけてほしそうな様子だった。
イリアさんやシュリちゃんにも、言ってみたほうがいいのかもしれない。
彼女たちを誘ったら、来てくれるだろうか？　イリアさんはどんなことにも関心を持って、

積極的に参加する性格だ。ロイドさんのことも気に入っているようだし、スケジュールさえ空いていれば、喜んで来てくれそうな気がする。
シュリちゃんのほうは、逆にロイドさんのことを苦手にしている様子だった。
アルカンシェル劇団に来ることになったときの一件で、いろいろとあったらしい。
しかし、イリアさんにはものすごく懐いている。彼女が来るのであれば一緒に来たがるのではないだろうか？
これを機会に、すこしでも彼女がロイドさんと打ち解けてくれたら嬉しかった。
断られるかもしれないけれどシュリちゃんも誘ってみよう――と決める。
あれこれと考えながら、まず予定どおりオーバルストアへ向かった。
店の入口をくぐり、中へ。

オーバルストア《ゲンテン》――
昼時だからと混み合うような店ではないため、ゆったりと店内を見ている客が、まばらにいるだけだった。
念のため、周りに知り合いがいないかを確かめる。
リーシャはアルカンシェル劇団の一員で、それなりに有名人とはいえ、あくまでも一般市民だ。それが、戦術オーブメントなんて持っているのは普通ではない。店員ならばともかく、知

人に見つかるのは避けたかった。
（…………大丈夫そうね）
そそっ、とカウンターに向かう。
「いらっしゃいませ！」
青色の帽子をかぶった女性の店員が、元気のいい挨拶をした。
胸元の名札に『ウェンディ』と書いてある。
「あの、ここの強化をお願いします」
バッグから戦術オーブメントを取り出して、スロットのひとつを指し示した。
普通の市民にしか見えないリーシャが、戦闘能力を持つ戦術オーブメント――しかも新型の第5世代《エニグマ》を出したので、ウェンディは一瞬だけ目を丸くした。
しかし、彼女もプロだ。
すぐに普段の表情に戻って、オーブメントを引き取る。
「ここのスロットの強化ですね？」
「はい、頼めますか？」
「もちろんです。あっ、ただ……今、ちょっと作業台のほうが混み合っていまして、すこしお時間をいただいてもよろしいでしょうか？　三〇分もあれば終わると思うんですが」
「……それくらいなら。あとで店に寄らせてもらえばいいですか？」

「すみません、そうしていただけますか」
「はい」
改めて、ウェンディが計算機を何度か叩く。
専用のディスプレイに数字が並んだ。
「ここのスロットの強化には、これだけのセピスが必要になります」
「用意してきました」
リーシャは指定されたセピスをカウンターのうえに出した。セピスとは七耀石（セプチウム）の欠片のことで、魔獣が落とすと言われている。七色の輝きを持つ小さな石で、まるで宝石のように美しい。
これを使うことで、戦術オーブメントを強化したり、魔法（アーツ）の源となるクオーツを作ったりできる。
専用の機械のおかげで、計量は一瞬だ。
ウェンディが引き替え用の金属プレートを出した。番号が書いてある。
「それでは、三〇分後に。こちらをカウンターまでお持ちください」
「はい、よろしくお願いします」
会釈して、リーシャはカウンターを離れた。
知人と鉢合わせしないよう、そそくさと店を出る。
すこしの時間とはいえ、戦術オーブメントが手元にないのは心許ないが、裏の仕事は入って

いない。
雇い主は、ライバルのマフィアが調子を落としているうちに、その取引先を奪い取ることに熱中しているらしく、しばらく前に会ったきりだった。
リーシャ・マオは表では、アルカンシェル劇団の新人スターとして知られている。
そして、裏の社会では、姿を変え――
暗殺者《銀（イン）》と名乗っていた。
東方人街の魔人。伝説の凶手などと恐れられている。
どちらの立場も彼女にとっては重要であり、父親から継いだ暗殺者としての業も、イリアさんから教えてもらった生き方も……
オーバルストア《ゲンテン》を出て、リーシャは左右を見回した。
誰かに見られていないか、と気に掛ける。
問題はないようで、ほっと息をついた。

「さてと……」
三〇分ほど時間ができてしまった。
この間に、済ませておいたほうがいい用事がある。
（お茶会に行くのなら、何か持っていったほうがいいわよね？）

ケーキと紅茶があるとは言っていたけれど、手ぶらで行くというのは失礼ではなかろうか。
しかし、日持ちしないものだと余ったときにもったいないし、ロイドさんたちも困ってしまうだろう。
「何かいいものは……」
中央広場で視線を巡らせると、百貨店《タイムズ》が目に入った。
時計のように針がぐるぐる回る看板が、なかなか目立つ。高級品から日用雑貨まで幅広く取り扱っている総合小売店だった。
ここなら何か見つかりそう。リーシャは百貨店へと向かった。
陳列棚を見て回る。
どうせなら、食べられる物がいいだろう。
そして、日持ちする物だ。
干物や缶詰がいいだろうか？　いや、それは、可愛らしくない。お茶会には不釣り合いに思える。
イチゴのジャムを見つけた。美味しそうだけれど、特務支援課にもありそうだ。
すこし歩くと、ビスケットのコーナーがあった。
「あ、これがいいかも」
ケーキのお供につまむのは、ちょうどいいし、保存食のように持つわけではないけれど、そ

う簡単に傷むわけではない。
　しかもいろいろな種類がある。目移りしてしまって選ぶのが大変だ。
「えっと……えっと……あら？」
　そんな優柔不断なお客を見越したかのように、何種類もの詰め合わせ（アソート）があった。
　さすがは、市民に愛される百貨店。
　リーシャはその包みを持って、レジに向かう。
　彼女の横をスミレ色の髪をした小さな女の子が歩いていった。十二、三歳くらいだろうか？
　ゆったりと優雅な身のこなしなのに、いつの間にか先にいる。
　この辺りでは見かけない服装だ。幅広の襟と短いネクタイ。お人形のようにフリルのあしらわれたドレスを着ている。
　リーシャはなぜか彼女に目を奪われた。
（不思議な空気のある子……）
　会計をして、百貨店を出る――
　オーバルストアに行くにはちょうどいいくらいの時間になっていた。
　予定通りに、戦術オーブメントを受け取って、軽めのランチを取ってから、特務支援課のお茶会に参加する。

　楽しい午後になる予定。
　そのはずだった。
　ふと、リーシャは人混みに視線を引きつけられる。
　歩いていくのは、小さな女の子。
　先ほど百貨店のなかで見かけた、スミレ色の髪をした女の子だった。
　優雅にマイペースに歩いているのに、まったく周りの人たちとぶつからない。周りが意図して避けているわけではない。
　計算しつくされた舞踊のように、彼女がまっすぐ歩く先に、たまたま人がいないのだ。
　自然すぎて、かえってリーシャは注目してしまった。
　どうやら、一人だけの様子。
　そして、彼女の向かっている先は――
（え？　裏通りに？）
　クロスベル市民なら、誰もが避ける。そんな場所だ。いかがわしい店や、マフィアのアジトが軒を連ねている。
　そんな特に治安の悪い通りへ、仕立てのいい服を着た可愛らしい女の子が一人で入って行ってしまう。
　リーシャは駆けだしていた。

（……あの子……放っておくわけにはいかない）

——失敗した。

リーシャは長らく一人で暮らす時間が長かったせいか、自分の容姿に無頓着なところがある。

劇団で演技するときであれば、もちろんメイクはしてもらうし、衣装も用意してもらって、おめかしするし、それを嬉しくも思っている。

しかし、劇場の外では、自分を特別だと思うことがなかった。

残念ながら、裏通りにたむろしていた男たちにとっては、リーシャは平凡ではなく、黙って通せる相手でもなかったらしい。

「おいおいおい……すげえ美人だぜ⁉」

「なあ、あんた、もしかして旅行者かい？　どこに用があるんだ？」

「俺たちが、案内してやるよ」

三人の屈強な男たちが、じりじりとリーシャに近づいてくる。

「いえ、人を探しているだけですから……小さな女の子、見かけませんでしたか？」

裏通りには物陰が多いので、何かトラブルに巻きこまれたとはかぎらないが、スミレ色の髪

の女の子は、その姿を見つけることができなかった。

リーシャは焦燥感にかられてしまう。

男が首をかしげた。

「は？　ガキなんか、こんなとこに来るわけが……」

「バカ！」

もう一人が、その男の頭を殴った。

別の男が、にやけた顔で言う。

「ああ、見た見た！　小さな女の子ね！　こんなところに来るのは珍しいから、すぐ気付いたよ！　あんたの探してる子かわからないけど、確かめたらいいよな？　こっちだよ。案内してあげよう」

「え？　いえ、その必要は……」

そういうことか、と最初に首をかしげた男まで、「ああ、そういや見たな！」と口裏を合わせてリーシャを囲んでくる。

こんな連中、素手でも何とでもなるが——

「へへへ……あんた、リーシャ・マオに似てるって言われないか？」

「っつーか、もしかして……本人じゃね？」

「いやいやいや、まさか！　アルカンシェルのスーパースターが、こんなとこ来るわけねえだ

ろ⁉」
「くっ……」
いくら身の危険を感じたからといって、怪我をさせたら、劇団に迷惑がかかるかもしれない。
新人劇団員のリーシャ・マオが裏通りでケンカ——なんてニュースになったら、どれほどイリアさんが失望するか。
あれこれと考えてしまい、踏ん切りがつかない。
逃げるだけなら、まだ簡単だが……
ここで自分が逃げたら、こんな危ない場所へ来てしまった、あの女の子はどうなるのだろう？
先ほどのロイドの言葉を思い出す。
誘拐事件を起こした犯罪者が、クロスベルに流れてきているという。
リーシャは拳を握りしめた。
たとえ、名も知らぬ子供のためであろうと。もしかしたら、危険な目に遭わず通りを抜けていったかもしれないとしても。自分が光のあたる道を閉ざされるとしても……
我が身可愛さに、子供を見捨てるような卑小な者には堕ちたくない！
「……どいてください」
「ひゃひゃひゃ！　そう言われて、ハイと素直に——ッ⁉」
正面に立っていた男が言葉を失う。

囲むように左右に立った者たちは笑い続けていたが。
リーシャは〝リーシャ・マオ〟ではなく《銀（イン）》の闘気を発していた。真正面から受けた男が、半歩、後ずさる。
「おまえ……いったい……⁉」
目の前の、か弱そうな少女から、いきなり魔人の殺気を叩きつけられ、男は混乱していた。
もしも、もっと戦いに通じた者だったなら、その実力を感じ取って飛び退いていたことだろう。
右側にいる男が、リーシャへと手を伸ばしてくる。
「こっちに来いよ！　悪いようにはしねえからさ！」
男の手を打ち払う。
その直前——
先に、リーシャの手を取った者がいた。
男たちの間を、するりと猫のように抜けて近寄ってきたのは——探していた女の子だった。
「ふふふ……」
「えっ⁉」
にこっ、と女の子が笑う。
頭のリボンを揺らして、小首をかしげる仕草が、あどけなく可愛らしい。

「やあね！　こんなところで何してるの⁉　ママってば！」
「マ、ママ⁉」
　思わず、リーシャの声が裏返った。
　左右を囲んでいた男たちが、ゲッて顔をする。
「おいおい……そんな歳なのか？」
「うそぉ⁉」
　男たちが怯んだのと同時に、ぐいっと女の子がリーシャの手を引いた。
「さあ、行きましょ！　ママ！」
「んもう！　この子ったら、どこに行ってたのよ⁉　ママ、心配したじゃない！」
　演技ならば、リーシャだって本職だ。
　母親の役は初めてだけれど、楽しむ余裕すらあった。
　手をつないで、二人して裏通りを駆け抜ける。

「うふふ、おかしかったわね」
　女の子が薄紅色の唇を指先で隠し、鈴の音のような笑い声をあげた。

　裏通りを抜けて、歓楽街に出たところだ。
　リーシャは息をつく。
「は～、びっくりしました。うまくごまかせて、よかったです」
「ふふ……大きな子供がいるような歳のわけがないのに……えらそうに威張るわりに何もわからないのね」
「ううぅ……助かったのは嬉しいけど、ちょっと複雑です」
「お姉さんみたいな女性(ひと)が、あんなところへ一人で行くなんて、危ないわよ？」
　これでは、立場が逆だった。
　助けてもらった手前、仕方がないことではあるのだが。
「私としては、小さな女の子が一人で入っていくほうが危ないと思ったんですけど……どうやら、そんな心配は必要なかったみたいですね？」
　くすり、とリーシャも微笑む。
　スミレ色の髪の子が、目を丸くした。
「心配？　もしかして……レンのことを心配したの？」
「ええ、まぁ……助けてもらった後で、こんなことを言うのは、どうかと思いますけど」
「そう……」
　レンが目を細める。微笑みと苦笑の間を取ったような、まだ十二歳くらいの女の子が浮かべ

るには複雑すぎる表情だった。
　いったい、彼女にどんな生い立ちがあるのだろうか。リーシャも一般的とは言いがたい育ち方をしているが、それとは別種の何かがあるような気がした。
「あ……助けてもらったのに、お礼も言ってませんでしたね。ありがとうございました」
「……お姉さん、ちょっと変わってるわね」
「そう、ですか？」
「むしろ自分を普通だと考えているなら、どうかしていると思うのだけれど。だって、お姉さんには大きな秘密があるでしょう？」
「ッ⁉」
　リーシャは緊張を高めた。
　すべてを見透かすかのような瞳に、思わず息を呑む。
　――まさか、こんな子供に《銀(イン)》であることが？
　先ほど、一瞬だけ闘気を放ったせい⁉
　女の子が薄く笑う。
「うふふ、平凡な人間が……アルカンシェルのスターになんかなれないでしょう？」
　そっちのことか！
　今度はリーシャのほうが目を丸くする番だった。

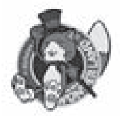
「あ……私のことを知ってるんですか？」
「レンは意外と物知りなの」
「この格好で、メイクもしていないと、なかなか気付かれないものなのですが」
「そうみたいね……ふふ、変なの」
「あの……あなたは、レンちゃんというお名前なんですか？」
「ええ、レンはレンだから、レンでいいわ」
「はい」
　不思議な雰囲気の少女との会話は、まるでお伽噺の魔法の国に迷いこんだような、わくわくさせられる楽しさがあった。
　そういえば、とリーシャは首をかしげる。
「レンちゃんはどうして裏通りなんかに入っていったんですか？」
「うふふ、あそこには、とっても素敵なアンティークドールのお店があるの」
「お人形ですか……そのために、あんな危ない場所に……」
「平気よ。路地の奥の黒メガネさんたちも、けっこう楽しい人たちだもの。あそこには危険なことなんて何もないわ」
「そ、そう……」
　どういうことだろうか？　ああ見えて、実はマフィアの人たちは子供好きで、小さな子には

優しかったりするのだろうか——とリーシャは考えた。
さほど天然でもなければ世間知らずでもないリーシャだったが、目の前にいる可愛らしい女の子が、マフィアたちが束になっても敵わない超常的な存在であるとは、いくらなんでも思いつかない。
それよりは、裏社会の者たちが意外と優しい面もある、というほうが納得しやすかった。
よくよく考えてみると、子供では持っている金額などたかが知れている。脅したところで、大して得られる物はないだろう。
子供を連れ去ったりしたら、誘拐事件になる。計画もなしに引き起こすには、あまりに重大な犯罪だった。
だからといって、子供が一人で裏通りを歩いて、安全とは思えないが。
裏通りに足を踏みこんで、彼女の姿がなかったときの嫌な感覚を思い出し、リーシャは表情を固くしてしまう。
くすくす、とレンは笑みを浮かべていた。
「レンに何かあったかと思ったの？」
「そうですね。誘拐でもされたかと……そういうことをする犯罪者グループが、クロスベルに来ている、と知り合いの警察官から聞いていましたから」
「……誘拐？」

レンが目をすがめた。わずかに声が固くなっていたかもしれない。
リーシャは彼女が少しでも慎重になってくれれば、と話しておくことにした。
「ええ……共和国で事件を起こしたことがあるそうです。まだ警察でも、情報を集めているところみたいですけど」
予想以上に、レンは重たく受け止めたようだ。
真剣な表情で、何事かをつぶやく。
「……そう。だから……ネットワークに……まだフィルタリングが……小さすぎると、こぼれることも……」
まるで膨大なデータを処理している最中の導力端末のよう。あるいは、機械仕掛けの人形にでもなってしまったかのような雰囲気だった。
別の意味でリーシャは不安になってしまう。
「あの、レンちゃん？　大丈夫ですか？」
「ん……ええ、もちろん問題ないわ。その情報は拾えてなかったから、聞けてよかった。たまには気まぐれを起こしてみるものね」
「レンちゃんは、しっかり者みたいだから心配ないと思いますけど、そういうことだから気をつけてくださいね」
「うふふ……あ、ごめんなさい。〝気をつけて〟なんて言われたの久しぶりだから、なんだか可

笑しくなってしまったわ。そうね……気をつけておくわ。ありがとう、お姉さん」
「いえ……」
リーシャはうなずきつつも、お姉さんと言われている自分のほうが年下のような、あるいは、彼女が上であるかのような、妙な錯覚を感じていた。
レンの言動が異常なほど落ち着いているせいだろうか。容姿も声も、間違いなく子供だというのに。
「お姉さん、その話は警察官から聞いたのよね？」
「ええ、特務支援課のロイドさんから。ちゃんとした人だから嘘は言ってないと思います」
「そう……お姉さんは、あの警察のお兄さんと知り合いなの」
「はい。以前、とある事件で助けてもらったことがありまして」
「有名人は大変ね」
「レンちゃんも、ロイドさんとお知り合いなんですか？」
「知り合い……そうね……どういう括りで呼べばいいのか、わからないけれど……レンも……助けてもらった側かしらね」
「そうですか」
お互いの事情を全て話したわけではないし、レンには底が知れない雰囲気がある。
しかし、共通の知り合いがいたことで、より親密になれた気がした。

彼女のほうもそう思ったのだろう、少し表情がやわらかくなる。
「お姉さんの話を、もうすこし聞きたいわ。どうかしら？　立ち話もなんだし、ランチにしない？」
「そういえば、お昼がまだでした」
「すこし歩くけれど、なかなか美味しいパン屋さんがあるの。最近のお気に入り」
「いいですね」



リーシャはレンと並んで、西通りへと向かった。
「この先にある《モルジュ》というお店よ。知ってるでしょう？」
「はい、私も何度か」
「新作のオレンジパンが、なかなかいいの。情熱的？　なんだか、そんな濃厚な味なのよ」
「それは食べたことありませんでした」
「まだあるといいのだけれど」
「そうですね。昼食にしては遅い時間ですから」
ふと、子供の声がした――ような？

意識を集中させる。
レンも同じものに気付いたのか、真剣な表情になって黙りこんでいた。
今度ははっきりと聞きつける。
「悲鳴がしました！」
リーシャは言うが早いか駆けだしていた。すぐ横に、遅れずにレンがついてくる。
「その路地を曲がった先よ！」
「はい！」
聞こえたのは、小さな女の子の悲鳴だった。
そして、複数人の足音と息づかい。
闇に潜んだ声だった。
「急げ！」「暴れさせるな！」「これで最後だ！」
「いやぁ‼　助けてなの‼」
駆けつける。
果たして——
住宅街と西通りの間にある細い通りに、黒塗りのワンボックス導力車が停まっていた。
そして、配管工の格好をした不審な男たちが四人。
男たちは手に工具など持っておらず、小さな女の子を囲むようにして捕らえていた。

「あれよ！」
レンが指さして叫んだ。
リーシャの全身の血が沸騰する。

「なにをしているっ⁉」

怒鳴りつけた。
男たちが振り返り、血走った目で睨みつけてきた。
「くそっ！　見られた！」
導力車の運転席から、命令する声が飛ぶ。
「捕まえろ！　目撃者を出したなんて、俺たちがボスに殺されるぞ！」
その言葉に弾かれたように、女の子を捕らえていた四人のうちの三人が、襲いかかってくる。
ベルトに吊るした大型ナイフを抜いて！
「「「うるあぁぁッ‼」」」
まるで魔獣のようだ。
理性の感じられない凶暴さ。
そのくせ、三方から同時に斬りかかってくる。動きは訓練された者の、それだった。

——共和国の元軍人？　あるいは、傭兵崩れ？
こんな日なので、当然ながらリーシャの手に武器はない。
戦術オーブメント《エニグマ》もメンテナンスに出したままだった。
しかし、そんなことは関係なかった。
はっきり言って格が違う。
武器など必要ない。
リーシャが本気になれば、元軍人だろうが傭兵だろうが、この程度の遅い連中になど、もし
も両手を縛られていたとしても負けはしなかった。
蹴りを一閃。
男たちの手から、ナイフが飛んだ。
地面に落ちて、金属音をたてる。
圧倒的な実力差を、たった一撃の蹴りで見せつけられ、男たちはたたらを踏んだ。
「うっ⁉　ううぅ……⁉」
「こ、こいつ……何者だ⁉」
「強い⁉」
リーシャは威圧的に間合いを詰める。
「あなたたち、共和国から来たという誘拐グループですね？　もう逃がしません。おとなしく
観念してください」
三人が歯噛みしつつ、ふと視線をリーシャの背後に向ける。
そのとき、六人目の男の声がした。
「そっちこそ、おとなしくしな！　さもないと、こいつが無事じゃ済まないぜ⁉」
振り返る。
なんと、新たに現れた男に、レンが捕まっていた。
がっしりと肩を掴まれ、首筋にナイフを突きつけられている。
「ごめんなさい……お姉さん」
彼女の表情に怯えた様子はないが、申し訳なさそうに目を伏せていた。
「レンちゃん……」
リーシャは頭に血が上ってしまったことを悔いる。
冷静に気配を探っていれば、レンに近付く六人目にも気付くことができたはずだ。
男は慎重に、あえてリーシャから距離を取っている。
「動くなよ？　抵抗すると、こいつの首をナイフで……」
「わかりました。私のことは好きになさい。その代わり、レンちゃんと、そっちの子は解放し
てあげてください」
「バカか！　目撃者を残す気はねえよ」



「それなら、せめてケガをさせないように……酷いことをしたら、絶対に許しません」
怒気を叩きつける。
素人相手なら、これだけで気絶させせられたかもしれない。
しかし、連中は訓練された兵士だ。
怯みはさせるものの、それだけだった。
いくらリーシャといえど、女の子二人を人質に取られ、それなりの練度がある兵士たち六人が相手となると——無傷で助け出せる自信は持てない。
「おい！　早くしろ！　また見つかるぞ⁉」
導力車のなかから、また命令の声があがった。
ナイフを蹴り飛ばされ、怒気を受け、怯んでいた男たちだったが、慌ててリーシャに近寄ってくる。
今は自制するしかなかった。
連中は、どこから入手したものなのか、警察が使うような金属の手錠を持っていた。両手だけでなく足まで拘束される。
そして、口にロープを噛ませられ、声も出せないようにされた。
連中は自由を奪うと、三人がかりでリーシャの体をワンボックス導力車に運びこむ。まるで荷物のような扱いだった。

放りこまれた荷室には、他にも子供がいた。
うー、うー、と、くぐもった声で助けを求めるのは、小さな男の子たちが二人。そこに最初に捕まっていた女の子と、レンも押しこめられた。
リアゲートが閉じられると、窓もない荷室は完全に外から遮断されてしまう。
いや、運転席側につづく小窓があり、そこから誘拐犯の監視の目があった。
「妙な真似をしたら、全員、ぶち殺すぞ!? こっちには、まだまだ人質がいるんだ。おまえたちなんか、殺してもかまわないんだからな！ それと、女！ おまえの処分はボスが決める。せいぜい覚悟しておくんだな！」
恫喝の声に、女の子が泣きべそをかいて、男の子たちが恐がって震える。
リーシャは静かに怒りを燃やしていた。
レンは落ち着いたものだ。
むしろ、安堵したようにさえ見える。
「……そう……やっぱり、他にも捕まっている子たちがいるのね」
リーシャは何かの見間違えではないか、と自分の目を疑った。
荷室は暗くて、監視窓からの光しかない。
だから、きっと見間違いなのだろう、と思った。
手錠で拘束され、誘拐犯のアジトに向かっている。こんな状況に陥っていながら――

レンが氷のように冷たい笑みを浮かべた。

ワンボックス導力車の荷台には、窓ひとつなく、車外の音も聞こえにくい。
しかし、リーシャは身体に感じる加速や旋回の荷重だけで、どれくらいの速度でどの向きに走ったのか、ほぼ正確に把握することができた。
旧市街――
そのなかでも、とくに端のほうにある建物の地下だ。
つまり、ジオフロントD区画か。
ここは市民が入り込めるような場所ではないはずだが、なにせ管理の行き届かない地域だ。どこかの建物から侵入できたとしても、不思議はなかった。
導力車のリヤゲートが開けられる。
やはり、地下だ。
カビの臭いが鼻につく。
使われていない倉庫区画だろうか。埃の積もった木箱や樽が、そこかしこに置き去りにされ

ていた。
照明は最小限しかなく、薄暗い。導力車のライトだけが煌々と周りを照らしていた。
もっとも、リーシャは真っ暗闇であろうとも、周りを把握する術を身につけているが。
（ここがアジトですか……）
いくつもの倉庫に繋がる大きな配車場らしい。トラックの積み荷を載せたり降ろしたりする場所だった。
天井はクレーンを使えるように高くなっており、そのぶん照明が遠くて暗さに拍車を掛けている。
リヤゲートを開けた大柄な男が、荷室を確認した。
「ふん！　こっちのガキ三人は、連れて行け」
薄暗いので顔まではわからなかったが、声からして運転席にいた男だろう。先ほどの六人のリーダー格だ。
「この女と、もう一人のガキは予定外だ……ボスに判断してもらうから、別の部屋に閉じこめておくか。おい、降りてこい！」
無茶なことを言うものだ。リーシャの足を拘束したのは、彼らだというのに。
レンが肩をすくめた。
「……お姉さんは、足を縛られているみたいだけれど？」

「ん？　まぁ、いいだろう。手錠以外は外してやる。妙な気は起こすなよ？　こっちは仲間が大勢いるし、人質のガキもいるんだからな」
リーシャの口に噛まされていた縄が外される。
はぁ……と息をついた。
どうやら、この犯罪者グループのボスは、この男とは別らしい。そして、今は外出中のようだ。
リーシャは意識を集中させて、周囲の気配を探る。
――大人の気配が、十五人ほどか。
予想していたよりも多い。
おそらく、ほとんどが元軍人か、その訓練を受けたことのある傭兵だろう。
壁の向こうに、さらに何人かの気配があった。
これは、子供だろうか？
ずいぶん大勢を攫ってきたものだ。
リーシャと一緒に運ばれてきた子供たち三人が連れて行かれる。
泣きべそをかいている子を、今すぐ助けたい衝動に駆られたが……また人質を取られる前に、この人数を片付けるのは、武器もなしでは難しかった。
レンが、リーシャの手に触れてくる。
すぐ近くだけに聞こえるよう、ささやき声で。

「…………まだ、その時ではないわ」
「え？」
レンの言動は、よくわからない。
いずれにしても、抵抗するのは難しかった。
仕方なく、しばらくは彼らの言いなりになっておく。
リーダー格の男に指示され、導力車から降りた。そして、命じられるがままに歩いていき、どこか倉庫のような場所に閉じこめられたのだった。

ジオフロントD隔離区画。地下倉庫——
窓ひとつない。
照明は薄暗いが、一応は屋根に導力灯が点いている。
広さは、アルカンシェル劇場の楽屋くらいあるだろうか。二十人近くが一斉にメイクや着替えをしても大丈夫なくらいの広さがある。
とはいえ、奥のほうには木箱が積みあげられており、圧迫感があるが……
レンが壁際に座りこんだ。

「お姉さん、痛いところはないかしら？」
「ええ、大丈夫です」
「……ごめんなさいね、巻きこんでしまって」
「巻きこんだなんて……私こそ注意が足りませんでした。こんなに大勢のグループだとは思ってなかったですし」
人数だけならば、《銀（イン）》が契約している《黒月（ヘイユエ）》に匹敵するほどだ。
むろん、個々の練度の差はあるだろうが。
レンが微笑む。
「心配はいらないわ。きっと、警察のお兄さんが助けに来てくれるわよ」
「そうだといいんですが……ここは、旧市街の地下です。警察が調べに来るのは、少し先になるかもしれませんね」
「うふふ、大丈夫よ。ソバカス君に紐を渡しておいたから」
「え？」
「仔猫と遊ぶのが大好きな男の子なの。きっと、この場所も見つけてくれるわ」
「どういうことですか？」
「ふふ、恐い顔しないで。こういうことよ」
彼女がドレスみたいな洋服の裾を持ちあげる。

手首の戒めは填められたままなので、いささか不自由そうにしつつだが。
かわいらしい洋服の下から、四角い金属の箱を取り出す。そこには、仔猫のマークが描かれていた。
「……もしかして、オーブメントですか？」
「そういうこと。通話もできるけど必要ないでしょう。わざと場所を探知しやすくしておいたから、レンのことはもう見つけてると思うわ」
「なるほど。あとは警察が来てくれれば、ということですね？」
レンが黙ってうなずいた。
たしかに、警察が来てくれたほうが、大勢いる犯人を逃がさずに済むし、子供たちも確実に助けることができそうだ。
リーシャが動くにしても、そのタイミングのほうがいいだろう。
そういえば——とレンが包み紙を出した。
どこに持っていたのだろうか？
「これ、お姉さんのよね？　落としたみたいよ？」
「あ……」
それは百貨店で買ったビスケットだった。
ずっと手に持っていたが、男たちのナイフに蹴りを見舞ったあたりで、思わず放り投げてし

まったものだ。
「……拾ってくれていたんですか」
「ええ、ちょうど、レンのほうに飛んできたから」
「ありがとうございます」
「余計なことだったかしら？」
「まさか。そんなわけありません……あ……お昼を食べ損ねちゃったし、どうですか？」
リーシャは包みを開ける。
割れることもなく、ビスケットは美味しそうなままだった。
レンが表情をほころばせる。
「あら、いいわね」
「よかったら、いっしょに食べましょう」
「それなら、レンもいいものがあるわ」
彼女が取り出したのはジャムの瓶だった。やっぱり、どこに持っていたのかは不思議なのだけれども。
「あ、これって、百貨店（タイムズ）で売ってたやつですか？」
「ええ、そうよ」
「ビスケットを買うとき、これも美味しそうだなって思ってたんです」

「ちょっと甘くなりすぎるかもしれないけど」
「それじゃあ、試してみましょうか」
　薄暗い導力灯の下、イスもテーブルもない場所だったけれど、コンクリートの床のうえに、開いた包み紙をお皿にして。
　手首には戒めが填められていて。
　扉には鍵がかけられていて。
　リーシャはレンと二人で、ビスケットとジャムをならべる。
「どうぞ、レンちゃん」
「いただくわ」
　小さな手がビスケットをつまむと、その端でジャムをすくいとる。
　かわいらしい唇に、近づける。
　はむっ、とひと口だけ。
　嬉しそうに表情をほころばせると、白い指先で軽く頬をなでた。
「あら、美味しいわ。これはいいわね」
「私も一枚いただきます。はむ……ん……ああ、これは本当に美味しいです」
「種類もたくさん。アソートなのね」
「ええ、どれか一種類を選べなかったので」

「食べ比べよね。レンは嫌いじゃないわ」
「あ、この固い食感が、ジャムに合います。これはいいですね」
「レンは、こっちのやわらかいほうが好みかしら？　あえて、ジャムつきのビスケットにジャムをつけるのもいいかも」
「それは贅沢かも」
「うふふ……」
　お昼を食べていなかったこともあって、すいすいと手が伸びる。
　味だけでなく、色艶も本当に美味しそうなビスケットなのだけれども、薄暗い導力灯だけでは、それは堪能できなくて残念だった。
「ちょっと喉が渇きました」
「本当ね。こんなに美味しいビスケットがあるのに、紅茶がないなんて……お茶会にならないわね。物足りないわ」
「紅茶、欲しいですね」
「邪道だと言う人もいるけれど、レンはビスケットに合わせるなら、アールグレイのようなフレーバーティーが好きよ。味に負けてしまうと、紅茶を楽しめないもの」
「え？　邪道なんですか？」
「料理を楽しむなら、フレーバーは邪魔だ、という意見も、わからなくはないわね」

「なるほど……私の得意は東方の料理で、一緒に飲まれるのは緑茶とか水とかなんです。それに比べると、たしかに紅茶は香りが強いかもしれません」
「でも、一方のために、もう一方が控えめになる必要があるのかしら？　紅茶とお菓子があってこそのお茶会なのに」
「たしかに、邪魔をしないことより、最高の組み合わせを見つけるほうが、前向きですね」
「うふふ、そうよね。きっと素敵な相性の紅茶とお菓子があると思うわ」
「このビスケットに合う紅茶も……」
「……お気に入りの紅茶に合うお菓子を探すのも、楽しいものよ？」
「それは、楽しそうですね」
「本当に……あら？　これが最後の一枚みたい」
「ふふ、なんだか、夢中で食べちゃいましたね。子供の頃を思い出しました」
「ええ……」
　不意に、レンが口元を引き締める。
　わずかな振動を感じた。

　リーシャは意識を集中させて。
「ん……これは、大型の導力車のエンジン音でしょうか？　私たちが運ばれてきたものとは、別のようですね」
「とすると、ボスかしら？　思ったより早かったわね」
　レンは目を閉じた。
　鉄扉の外が騒がしくなる。
　それは、リーシャがやるような気配を探るのとは、すこし違う。集中しているのは間違いないが、もっと別種のものであるように感じた。
　いずれにしても、彼女の邪魔をしないように、リーシャは静かに待つ。
「…………」
　レンが目を開いた。
「……うん、だいたいの居場所は把握したわ」
「えっ⁉」
「レンたちが導力車から降ろされた配車場に十人。別室に五人。ボスと一緒に帰ってきたのが五人ね」
　彼女はコンクリートの床に指先で図面を描いていく。埃で指先が黒くなるのも気にせずに。

リーシャとて気配を読んで、アジトにいる敵の人数は把握していたが、どうやって部屋の配置や扉の位置まで掴んだというのか⁉

ドア数枚を挟んで監禁されている子供たちのことまで、レンは詳細に把握していた。

驚愕するしかない。

「…………レンちゃん……あなた、何者なんですか？」

「うふふ、それを説明している暇はなさそうよ。そのうち、わかることもあるんじゃないかしら？」

「そのうち……ですか……」

誘拐犯などより、目の前の女の子のほうが、遥かに危険な存在ではないか――と《銀（イン）》としての嗅覚が訴える。

レンがため息をつく。

「このタイミングで来てくれると最高だったのだけれど……思ったより、警察のお兄さんたちは苦労しているみたいね」

「ジオフロントには魔獣も出ますから」

「ここらの魔獣なんかで苦戦してほしくないけれど。まだまだ《風の剣聖（アリオス）》のようにはいかないわね」

「知っているんですか？」

「少しだけね……ここのボスの出方しだいだけれど……お姉さん、全力を出してもらったほうがいいかもしれないわ」

「………やっぱり、レンちゃんは、私のことを？」

この不思議な少女は、リーシャが《銀（イン）》であることにも気付いているのか。

いったい何者なのか？

レンが微笑む。

「言ったでしょう？　その詮索をしている暇はないわ」

ガチャリ、と外側から鍵が解除された。

ノックもなしに、ドアが開かれる。

ギィィィ――……と蝶番が嫌な音を立てた。

男たちが数名。

その先頭に立っているのは、スーツ姿の女性だった。

長い黒髪を頭の後ろで結っている。

すらりと手足が細長くて華奢な外見をしているが――居並ぶ男たちの誰よりも腕が立つことは、見ただけでわかった。

――手強い。

部屋の戸口の、すぐ外で、じっとリーシャたちのことを睨みつけた。

女が唇を歪める。
「なるほど、こいつは普通じゃないね。部下たちの手には負えないわけだ。でも、人質を取られたぐらいで拘束されるなんて、ずいぶんと甘いじゃないか」
「貴女がこの犯罪グループのボスですか……どうして、誘拐なんて⁉」
「はあ？　誘拐なんてミラのために決まってるだろう？」
「なんてこと……許せません！」
「ふん……この状況で、私に説教かますなんてね。度胸がいいのかバカなのか」
　控えている男たちが尋ねる。
「ボス、どうしますか？」
「そうだねえ……この器量なら、さぞかし高額のミラをふっかけられそうだけど……ピーピー泣くだけのガキと違って、こいつは猛獣さね。私は危ない橋は渡らないことにしてるんだ。構わないから、殺しておしまい！」
「「了解！」」
　ボスは部屋の前からいなくなる。
　入れ替わるように、でかい剣を持った男が三人も、ずいっと中へ入ってきた。
「くっ……」
　リーシャは歯噛みした。

　躊躇のない命令。
　剥き出しの殺意を叩きつけられた。
　レンがつぶやく。
「……お姉さん、ここで手加減するのは、優しさではないわ」
「ええ、そうね！」
　速攻でケリをつけなければ、捕まっている子供たちを助けることができない！
　リーシャは闘気を全開にする。
　部屋の空気が変わった。
　剣を持った男たちが身をすくめる。
「なっ……⁉」
「こいつ、いったい⁉」
「抵抗する気か⁉」
　一瞬の躊躇だけで、リーシャにとっては充分だった。
　クラフトを発動させる。
　月光蝶――

男たちが目を見開き、動揺を露にする。
「き、消えた⁉」
「ばかな！」
「どういうことだ⁉」
彼らは慌てて部屋の中に視線を巡らせた。まさに、今、対峙していたにもかかわらず、まるで幻だったかのようにリーシャの姿が彼らの視界から消えたからだ。
男たちの目に映るのは、打ち捨てられた倉庫と、冷笑を浮かべているレンと、ビスケットの包み紙とジャムの瓶だけだった。
リーシャは音もなく近付くと、蹴りを放つ。
「……ッ‼」
大きな剣を手にした男たち三人が、くぐもったうめき声をあげながら倒れこんだ。
ぐったりと動かなくなる。
レンは手錠されたまま、小さな拍手を送った。
「面白いものを見たわ。いえ、見えなかったと言うべきかしら？　気配の封絶と神速の歩法だけで、魔法(アーツ)もなしに視覚から姿を消すなんて。このレンの目にも消えたようにしか映らなかったわ」
「……初見で、どういった技なのか見抜かれたのは初めてですが」

「そんなことより、急がないと子供たちが危ないわよ？」
「はい！」
倒した男が持っていた剣を奪い取り、その鋒(きっさき)に手錠の繋ぎ目をあてがう。一気に押しこんで、断ち切った。
少し刃こぼれしたか。
別の剣を拾って、急いで部屋の外へと向かう。
目指すは子供たちの捕らわれている部屋だ。そこさえ確保できれば、もう人質を取られる心配はない。
「はぁぁぁぁ……ッ‼」
リーシャは闘気を高めていく。
再び、月光蝶を発動させる。
その動きは、もはやリーシャ・マオではなく《銀(イン)》のものだった。
薄暗い倉庫のなかで、そこかしこに物陰がある。こんな環境で、本気になった《銀(イン)》を視界に収めるのは、相当な実力者でなければ難しい。
まずは地下配車場に出る。
ボスが周りに指示を出していた。

「潮時（しおどき）だ！　ガキどもを導力車に積みこみな！　今度は帝国のほうへ行くよ！」
「え？　ミラはいいんですかい？」
「バカだね。〝子供を返すから〟と親に言えば、ミラは送金してくるだろ？　ガキなんざ、途中の山にでも埋めちまえばいいんだよ。ギャーギャー騒いでうっとおしいだけさね」
「クハーッ！　さすがはボスだぜ！」
「子供がいなくなった事実だけで、いくらでもミラは取れるのさ。まだ生きてるかなんて、こっちが教えてやらなければわかりっこないんだからね」
「ここで殺しちまったら、ダメなんですか？」
「バカだね！　死体を見つけられたら台無しじゃないか！　指の一本でも送ってやれば、親は震えあがって言うこと聞くんだよ！　自分たちの子供が、とっくに死体になってるとも知らずにね！」
「ちげえねえ！　ワハハ！」
　リーシャの血が沸きあがる。
　颪が渦を巻いた。
　床を蹴り、リーシャは天井近くまで飛翔する。
　もはや一切の慈悲は失せ、受け継いだ奥義を繰り出すことに、わずかな憐憫もない。

「我が舞は、夢幻（むげん）……」
　地下配車場に《銀（イン）》の声が響きわたった。
　誘拐犯たちが、慌てて周囲を見渡す。
　しかし、月光蝶により気配を遮断しているため、そう簡単に見つけることはできなかった。

「……去り行く者への手向（たむ）け……」

　ボスが天井へと視線を向ける。
　目をすがめた。
「うっ!?　上よ！　撃ちな！　撃てってのッ‼」
　他の者たちは、言われてさえリーシャを見つけられなかったが、命令されるがままに天井へ銃を向けた。
　暗闇のなかに、なにかがいるのだろう、と引き金を絞る。
　無数の弾丸が発射されるが、それらは天板のコンクリートをえぐり、剥き出しの鉄骨を叩くばかりで、リーシャをかすめることもなかった。

「眠れ、白銀（しろがね）の光に抱（いだ）かれ……」
「縛（バク）ッ‼」
リーシャの放った殺気が、広間にいる連中の動きを止める。まるで、ピンで標本にした羽虫のように。
いわゆる、気当て。
彼らは暗闇を睨んだまま、自分に何が起きたのかもわからず、指一本とて動かせない。
天井近くから、リーシャは急降下する。
裂帛の怒声とともに。
右手には奪い取った巨大な剣。
「ズゥアアアアアアアアア…………………滅（めつ）ッ‼」



薄暗い配車場に、誘拐犯たちが倒れている。
全員が意識を失い、動くことはなかった。
「はぁ……はぁ…………」
リーシャは肩で息をしている。普段ならば鎖のついた鉤爪（かぎづめ）と、幅広の大剣によって行使する奥義だ。
足りないぶんを気迫で補ったため、消耗が激しかった。
倒れている者たちのなかに、ボスの女がいない。
（――あ、いない⁉）
「しまっ……‼」
走りだした。
この区画の地図は頭に入っている。灯りなどなくても問題はなかった。
入り組んだ通路を抜ける。
三つある扉の全てが、開け放たれたままだった。
最も奥にある部屋へと辿り着く。
ここに、子供たちが捕らえられているはず。
リーシャの懸念は現実のものとなってしまっていた。
「ううぅ……」

部屋は、リーシャたちが閉じこめられていたのと同じくらいの広さがある。その奥のほうに、子供たちが十人ほど。
子供たちは口を塞がれ、手錠をかけられ、一本のロープで腰を結ばれて一繋がりにまとめられている。顔をくしゃくしゃにして泣いていた。
けれども、生きている。
大怪我をしているような子もいなさそうだ。
みんな無事——しかし、安堵できる状況ではなかった。
入口のところにリーシャがいる。
そして、部屋を入ったところ——リーシャと子供たちの間に、誘拐犯グループのボスがいた。
手にはサブマシンガンを持っている。
「ハァ、ハァ……少しばかり遅かったようだねえ！　クハハハッ！」
「くっ……なんてこと……」
「ずいぶんナメた真似してくれたね！　後悔するがいい！」
「待ちなさい！」
「フン……この状況で、私に命令する気かい？」
「撃つなら、私を！　私を撃てば気が済むのではありませんか!?」
リーシャは剣を捨てた。

女が唇の端を吊り上げる。
「ハッ！　残念だけど、その手にはのらないね！　私の実力じゃ、あんたを狙った瞬間に仕留められちまうだろうからね！　リスクは背負わない主義なのさね」
「それなら、子供たちを解放してください！」
「黙りな！　剣を拾うんだ。そして、自分を刺すんだよ！　内蔵をぶちまけて死ね！　そしたら、子供たちを逃がしてやる！」
「……本当に逃がしてくれるんですか？」
にやり、と女が嗤（わら）う。
「ああ……私は嘘は言わない」
「……ッ」
信用できる相手ではない。
しかし、ぐずぐずしていたら、この女は子供たちに向けて、マシンガンを撃ちかねない。
おずおずとリーシャは床に落とした剣に手を伸ばした。
掴みあげる。
女は得物を捕らえた蛇のような目で、舌なめずりをした。
「さあ！　子供たちのために、自分の心臓に……剣を刺すがいい！」
「ほ、本当に……解放してくれるんですか？」

「残念だね。信用してくれないなら、子供たちを殺すしかないじゃないか……どれ、じゃあ、まずは一人目を……」

「待ってください！　わ、わかりました……」

リーシャは観念した。

可能性は低くとも……今は、こうするしかない。

剣の鋒を自分の胸へと近づける。

死ぬことへの恐怖は――それほどでもない。裏社会に生きていたら、死の訪れることもあるだろうと覚悟していたから。

しかし、残す人たちのことを考えて、目頭が熱くなった。

イリアさんは、なんて言うだろうか？

今夜の公演も気合いが入っていたのに、すっぽかすことになってしまう。

いろいろと教えてもらったのに、もう永遠に踊ることができなくなるのかと思うと、それが悲しい。

シュリちゃんは怒るだろうか？　勝手にいなくなってしまって。

妹ができたようで嬉しかったのに、もう話すこともできなくなってしまう。

アルカンシェル劇団のみんなも。まるで家族のように優しくしてくれたのに、お別れしなくてはいけない。

そして、ロイドさん……

……さようなら。

リーシャは心の中で、そっと涙をこぼした。

息を呑む。

「…………ッ‼」

「ばかなことをするものじゃないわよ、お姉さん？」

可愛らしいのに、冷たい――そんな声。

リーシャの背後から、声をかけてきたのは、スミレ色の髪の女の子だった。

「あ…………レンちゃん」

「そんな女が、約束を守るはずないでしょう？」

誘拐犯のボスが唾を吐いた。

「フン、次から次へと、よく死にたいやつの現れる日だねえ！」

レンが普通の女の子でないことは、さすがにリーシャとて気付いている。

しかし、この状況で何ができるというのだろうか？

ボスは相変わらず子供たちにマシンガンを向けており、その引き金にかかった指は、いつ絞

られるかわからない。
十人いる子供たちの命が握られているのだ。
天井から、ぱらぱらと埃が降ってくる。
誘拐犯のボスが、これ以上ないくらい殺気を放っていた。
レンは気にした様子もなく、まるで野山を散歩するような足取りで、部屋に入ってくる。
リーシャの横にならんだ。
「なにしてるのかしら？　さっきも言ったけど、お姉さんが死んでも子供たちは誰も助けられないわ。一人もね」
「で、でも……このままじゃ、あの子たちが殺されてしまいます」
「なにを言っているの？　この先、あの女を生かしておいたら、もっと大勢の被害者が出てしまうのよ？」
「だからって、子供たちを助けないって言うんですか⁉」
リーシャとて《銀(イン)》として裏社会に生きる者だ。命を秤にかけることもある。
しかし、目の前の子供たちを見捨てるような発言をレンがするなんて、信じられなかった。
この女の子には、なにか特別なものを感じていたのに。
それは勘違いだったのだろうか？
レンは誘拐犯の女を見つめる。

「うふふ、降参なさい。そうしたら、命くらいは助けてあげるわ。それとも、子供たちと一緒に死にたいのかしら？」
「…………ああ、こいつは……おかしいね。計算違いだよ。私より頭のネジが飛んでるヤツが出てくるなんて」
「あら、失礼ね。レンは子供を誘拐するほど、ひどくないわ」
「クハハ、知らないのかい？　誘拐殺人は重罪だ。私は共和国で何件もやっちまってる。今さら、同じなんだよ。ここで十人ばかり見逃したとしても……捕まったら、同じだ！」
もう完全に、女は常軌を逸していた。
計算とか、理性とか、そんなものは失ってしまっている。
血走った目で周りを睨み、唇の端から泡をこぼし、全身を震えさせた。
がくがくと震えて狙いの定まらない銃口を、子供たちに向けたまま、喉から悲鳴のような声を絞り出す。
「全員、死ね！」
「やめなさい……ッ‼」
間に合わない！　そうわかっていても、リーシャは剣を投げつけようとする。
いかに魔人と恐れられ、神速と謳われようと、指をひとつ絞るより速くは動けない。
こんな状況で、間に合うとすれば――

女が撃とうとする前から、注意を向けられていない方角から、すでに先に動いていた者だけだろう。
そう……
たとえば、上から、とか。

天井が、崩れた。

巨大な黒色の塊が、階間のコンクリートを砕き散らし、天板やら照明やらと一緒に落ちてくる。
部屋は轟音に包まれた。
真っ白な砂煙に、リーシャは目をすがめる。
「ううぅ……!?」
いったい何が起きたのか？
天井の上で、何かの機械が動いていることは気付いていたが、人間の気配がなかったので、まさか、こんなことになろうとは予想していなかった。
天井を突き破ってきたのは、黒色の鉄塊だった。
リーシャは煙を吸いこまないようにしつつ、子供たちに声をかける。

「みんな、無事ですか!?」
落ちてくるコンクリートの破片や、聞いたこともない機械の駆動音のせいで、うまく気配が探れない。
しかし、何人かが「うー、うー」とうめく声がした。
生きてる！
真っ白な砂煙が収まってきた。
リーシャには、子供たちの生きている気配が伝わってくる。
安堵が、じわじわと胸に広がった。
天井を突き破って入ってきた黒色の鉄塊が、動きだす。
空気の抜ける音や、何かが回転する音をたて、その塊は、ゆっくりと開いた。
「あ………手!?」
それは指の一本だけでも人間くらいの大きさがある、巨大な三本指の手だった。
怯んでいるリーシャの横を抜け、足音もなくレンが駆け寄る。
「ありがとう、パテル＝マテル」
指とも爪ともつかない金属の手に収まる。
リーシャは呆然とするしかなかった。
「……それ……レンちゃんの？」



「うふふ、さようなら、お姉さん。ちょっと騒がしかったけれど、楽しかったわ」
「あ、あの……」
　何を言ったらいいのか、混乱してしまって言葉が出てこなかった。
　レンが、やっぱりどこから取り出したのかわからないけれど、ビスケットを手にしている。
　あれは最後の一枚と言っていた……
　彼女の笑みに、リーシャは肩の力を抜いた。
「はぁ……あの……ありがとうございます」
「いいのよ。レンが許せなかった。それだけのことだから。ああ、レンのことは秘密にしておいてくれると嬉しいわ。この街では何もしないって、とある人と約束してしまったから」
「わかりました。私も内緒にしてること、ありますし」
「うふふ、そうね」
　リーシャの背後から、大勢の足音が響いてきた。
　この様子だと、警察が踏みこんできたのか。
　レンが見つからずに済ませたいというのなら、もう時間はないだろう。
　惜別の想いに言葉を詰まらせる。
「あ……また、いつか、今度は、ちゃんとした場所で……」
「うふふ、いいわね。お姉さんと、またお茶会ができるのを楽しみにしているわ。次は埃っぽ

くない場所で、美味しい紅茶と、このビスケットと」
「ジャムも忘れずに、ですよね？」
リーシャはレンと笑みを交わした。
駆動音と微振動を伴って、パテル＝マテルと呼ばれた機械が、上へと持ちあがっていく。手に包まれた彼女の姿も消えていく。
あとには、天井の大穴だけが残された。

三時のお茶会には、すこし遅れそう。
けれど、夜の公演には間に合うだろう。
ひと安心だ。
助かった子供たちが、今度は安堵して泣きはじめる。
ああ、よかった。
みんな、助かった。
天井に空いた穴を見上げて、リーシャは気が抜けたように息をつく。
あの不思議な女の子は、いったい何者だったのだろう？
とても奇妙な、お茶会だった。
「うふふ……」
彼女の仕草を思い出し、リーシャは笑い方を真似てみる。
通路を大勢が走ってくる足音がする。ようやく、特務支援課の面々がやってきたのは、そのすぐ後だった。

ロイドたちは、アジトの奥へと駆けつける。
倉庫内の天井には大穴があり、コンクリートの破片が部屋の中央に積もっていた。
ずっと放置されていた区画だから、天井が崩れたのだろうか？　しかし、倉庫の真上は荷物を満載したトラックが通ることもある大通りなのに……？
行方不明になっていた子供たちは、無事に全員を保護することができた。
ティオは安堵のあまり涙をこぼしてしまったほどだ。
ちょっとしたケガをしていた子供もいたが、エリィが手当てして、泣いている子をなだめてあげる。
ランディがコンクリート片に埋まっていた主犯を掘り出し、拘束した。共和国からもたらされた犯人写真と一致することを確認する。
他には、誰もいなかった。

子供たちは〝女の人と女の子がやっつけてくれた〟と言うが、その者たちを見つけることはできず。

ロイドたちが、さらにアジトを捜索した結果、得られた唯一の手掛かりは——

ビスケットの包み紙と、ジャムの瓶だけだった。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！ ※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.148プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）
3：アンケート①『イース』シリーズで航海で行ってみたい場所は？
　アンケート②『イースX』新キャラクターが続々登場中！ 第一印象は？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：イースX -NORDICS（ノーディクス）- 最新情報
2：も～っと集まれ！ ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 碧の軌跡 いつか貴方とお茶会を

応募締め切り 6月27日（火）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.148

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

Copyright

©Nihon Falcom Corporation.All rights reserved.
©2023 FIELD-Y
©DAISUKE ARAKUBO 2023
©SHINKI KITSUTSUKI 2023

日本ファルコム(株)のライセンス許諾商品です。